スカーフに、港の魂。

横浜スカーフと輸出商の物語



横浜市歴史博物館所蔵　横浜輸出スカーフアーカイブより
31418《カーネーション》（部分）昭和35年　仕向地：ロンドン

2026. 12. 1㊋ ― 2027. 1. 24㊐

シルク博物館　シルクセンター2F　横浜市中区山下町1番地

主催｜シルク博物館
共催｜横浜市歴史博物館　関東学院大学
企画・監修｜KGU横浜スカーフ研究プロジェクト
開館時間| 9:30―17:00（入館は16:30まで）
入館料｜一般500円　シニア・大学生300円　小・中・高校生100円
ただし、12月15日～会期中　小中学生無料、12月20日は終日入館無料
休館日｜月曜日（祝日の場合は翌日）　年末年始（12/28-1/4）

スカーフに、港の魂。
横浜スカーフと輸出商の物語

開港後、生糸や絹織物輸出により日本の絹業界を牽引した横浜では、明治20年頃より絹製品の輸出が盛んになりました。

この絹物貿易を推進したのが商社でした。明治時代、横浜港における輸出は居留地貿易が主でしたが、明治32年に外国人居留地が廃止されると邦人商社が活躍する時代へと移行しました。その先駆けは外国人向け絹製品小売商を営んでいた椎野正兵衛ですが、『横濱輸出絹業史』（横浜輸出絹業史刊行会、昭和33年）によれば絹物売込商の中で先見の明ある者や外国商社で修行を積んだ者などが商社を立ち上げ直輸出を手がけるようになったとのこと、また『日本輸出絹業之大勢』（横浜輸出絹物同業組合 絹物貿易調査会、大正6年）には絹製品がもっぱら横浜で製造され、横浜の商人によって海外の顧客に販売されたことが記されています。

明治・大正初期、直輸出商は内外人合わせて100以上に及んだと言われます。これらの中には時代を越えて横浜市歴史博物館所蔵の輸出スカーフ意匠認定台帳（昭和32～61年）に名を留めている商社も散見されます。横浜スカーフ産業の発展の背景に明治・大正期に絹物貿易の礎を築いた輸出商らの存在を看過できないでしょう。

本展示では、先覚者として貢献した堀越商会、三井物産、竹村商会、南里貿易、丹波商会、また戦後に進出した野中スカーフ、外国商のストロング商会、インド商のチョットマルを紹介し、昭和30年代に輸出量が最大に達した昭和35年に取引されたスカーフをご覧いただきます。

主催｜シルク博物館
共催｜横浜市歴史博物館　関東学院大学
企画・監修｜KGU横浜スカーフ研究プロジェクト